

西高での思い出



大野先生

私は、昭和四十七年四月から、六十一
年の三月まで、実に十四年間、若い人た
ちにとっては、気の遠くなるほどの長さ
であろうが、私にとっては、濃縮した一
瞬に思われるこの期間、一宮西高校にお
世話になった。そして、現在、一宮西高
校は、私にとって、沸々と湧き、汲めど
も尽きぬ想い出の泉だ。それらは、時と
場所を選ばず、ぼんやりと外を眺めてい
るときの、一寸のすきを突いて、通勤の
満員電車の中でさえ、突然湧き出してくる。
私も、西高を語るとき、ようやく、同窓
生のみなさんと同じ立場に立てるのでら
う。

私の眼前によく浮ぶ西高の構造物は、
何といっても、正面玄関の附近と、体育館
の北側のメタセコイアなのだが——メタセ
コイアは、私が朝夕眺めていた樹木で、
その周りには、いつも季節が漂っていて、
生きた化石といわれる生命力と、ナイー
ブなたたずまいで、いつの間にか私の大
好きな樹になっていたのだが——圧倒的
によく思い出すのは、小さな出来事を通
しての、生徒や先生方の顔・顔・顔であ
る。

西高は、本当に「人」に恵まれていた
と思う。思い出される生徒諸君の顔・顔
・顔は、それが廊下を背景にしていたり、
修学旅行中の一コマであったりするのだ
が、どのひとりをとっても、みな素敵な

子たちだった。今は、どうしているのか
なあ、と思ってしまうのは、私の、老人
趣味なのだろうか。先生方にも恵まれて
いた。どのお方も懐かしい。職員会議の
ことや、学年会のこと、そこでの小さな
論争のことなども思い出すが、結論
は、いつも、いい方向に決まっていた。
最後のところで、みんなが、とことん西
高のことを思っている議論だったからだろ
う。

私は、よく朝礼で話す機会を与えられ
そのたびに、臆面もなく、それでも一生
懸命に、いろいろなことを話させてもら
ったのだが、そのひとつに、「思い出の先
取り」というのがあった。それは、今の
自分を、数年後の自分が、どう振り返り、
どう思い出すが、というところを、
今、考えながら、西高での毎日を過ごそ
う、ということであったのだが、これを
口にした当の私が、その頃のことを思い

出しているということは、赤面の至り以
外の何物でもない。この赤面は、教師の
宿命なのか、それとも、人生の宿命なの
か。それでも、この赤面も、西高という
大きな存在の中に包まれると、少しはや
わらいで、ほっと救われる。

私は、現在、名古屋市内の県立高校で
お世話になっているが、ここでも、一宮
西高校の評価は、極めて高い。最も消極
的な誉め方をする人でも、あそこは、生
徒がいいからね、といってくれるし、も
っとよく知っている人たちは、「西高精
神」を称賛してくれる。私も、同窓生(客
員)のひとりとして、とてもうれしい。
同窓生のみなさんと同じく、私も、今後
いよいよ西高が発展することを、祈って
やまないからだ。併せて、同窓会活動も
いよいよ盛んになって、西高同窓会が、
年輪とともに、すくすくと育って、大樹と
なられんことを、祈ってやまない。

常任幹事の皆さん

卒業回	氏名	現住所	電話
1	田中 吉晴	〒491 一宮市北園通	
3	小川 健一	〒491-01 一宮市浅井町大日比野	
4	金 久男	〒491 一宮市大宮	
6	浅野 良二	〒494 尾西市北今西田面一ノ切	
7	小関 隆史	〒491 一宮市本町	
8	山内 治己	〒491 一宮市天王	
9	松平 康彦	〒491-03 一宮市萩原町串字松本	
10	野倉 正人	〒491-01 一宮市浅井町前野字畑中	
11	金子 秀夫	〒494 尾西市東五城字上川田	
12	堀場 正人	〒491 一宮市大字大赤見	
13	伊藤 信久	〒491 一宮市丹陽町九日市場	
14	丹羽 徹	〒491 一宮市松降	
15	三輪 一吉	〒491-03 一宮市萩原町中島	
16	市原 博司	〒491 一宮市真清田	
17	伏 拓治	〒492 稲沢市高御堂	
18	伊藤 裕一	〒491-01 一宮市浅井町尾関字同者	
19	河辺 善成	〒491-03 一宮市萩原町萩原	
20	東城 隆司	〒491 一宮市丹陽町藤本	

昨年度総会



昨年度の同窓会総会は、会場を一昨年
の母校体育館から一宮スポーツ文化セン
ターに移し、八月十八日午後一時より開
催されました。参加会員は六十名余り、
旧職員として宇佐見忠雄先生が、また母
校職員として校長先生、教頭先生を含む
九名の先生方が出席されました。会は、
山内進同窓会長ならびに柘植敬一郎校長
先生のあいさつにはじまり、つづいて昭
和五十九年度事業報告・会計報告、昭和
六十年事業計画案・予算案の審議に移
り、いずれも満場一致で承認されました。
事務局から西高の近況について報告があ
った後、この日の総会にあわせて製作さ
れた「一宮西高同窓会総会」の立て看板
をバックに「同窓会総会」は懇親会(立
食パーティ)へと移りました。

昨年度の総会への会員の出席状況は、
残念ながらあまり芳しいとは言いがたく、
全体的に会に盛り上がりは欠いたことは
否めません。数日後の中日新聞尾張版に



昭和60年度 一宮西高同窓会総会

おいて、「出席六十人とは寂しいな」と
いう見出しで、本総会の模様が「いくぶ
ん危機感の漂うパーティ」として紹介
されたことを記憶されている方も多し
と思います。にもかかわらず、懇親会では
各テーブルで談笑の花が咲き、最後は、
参加者一人一人が来年の参加者をもつと
ふやすことを決意しつつ、西高の校歌を
高らかに歌って会を閉じました。本年度
の総会には一人でも多くの会員が参加し
て、若い西高同窓会をみんなまで盛り上げ
ていこうではありませんか。
なお、この会報の別項で紹介されてい
ますが、昨年度の総会に出席した第六回
卒業生の間で合同クラス会の話がもちあ
がって、今年一月に実現したことをつけ加
えておきます。